

[成果情報名] 春季シラス漁の漁獲量予測の試み

[要約] 春季シラス漁の漁期直前に仔魚の分布量を調査し、漁獲量との関係を調べた。その結果、仔魚の分布量から予測した漁獲量と実際の漁獲量とはよく一致した。漁獲量予測を行う際は、水産試験場が発行する「紀伊水道春シラス漁場調査速報」が参考になると考えられる。

[キーワード] シラス、漁獲量予測

[担当機関名] 水産試験場・資源海洋部

[連絡先] 0735-62-0940

[部 会 名] 水産

[分 類] 研究

[背景・ねらい]

和歌山県産のシラスは「和歌山産」として有名で、平成 16 年の漁獲量は全国第 7 位、本県魚種別生産額では第 1 位となっている。主漁場である紀伊水道東部海域において、シラスは 1995-2004 年の年平均で 3,000 トン漁獲され、年々の漁獲量は最低と最高で 2.2 倍の変動がある。このような中で、漁業者や加工業者から、漁獲量の予測に関する情報の提供が求められている。予測が可能となれば、分布量が少ない場合には成長を待って出漁するなどの漁業管理も可能となる。本研究では、春季のカタクチイワシシラス漁が始まる前に、孵化直後の仔魚の分布量を調査し、カタクチイワシシラスの漁獲量との関係を調べ、漁獲量予測への利用の可否について検討した。

[成果の内容・特徴]

1. 外域の定点(図 1)における仔魚の分布量から予測した漁獲量と実際の漁獲量は類似した変動を示した(図 2)。
2. 特に、2004 年の豊漁を事前に予測できた(図 2)。
3. シラスの漁獲量にとって、外域(補給源)により多くの仔魚が分布することが重要である。

[成果の活用面・留意点]

水産試験場では、本調査結果を記載した「紀伊水道春シラス漁場調査速報」を通じて漁業者等に情報提供を行っている。漁獲量の予測を行う際は、外域における仔魚の分布量が参考になる。また、現在の予測は、データが 7 年分しかないため、「前年より多い」「前年より少ない」程度であるが、今後も同様の調査を継続することで、より精度の高い定量的な予測も可能になると考えられる。

[具体的データ]

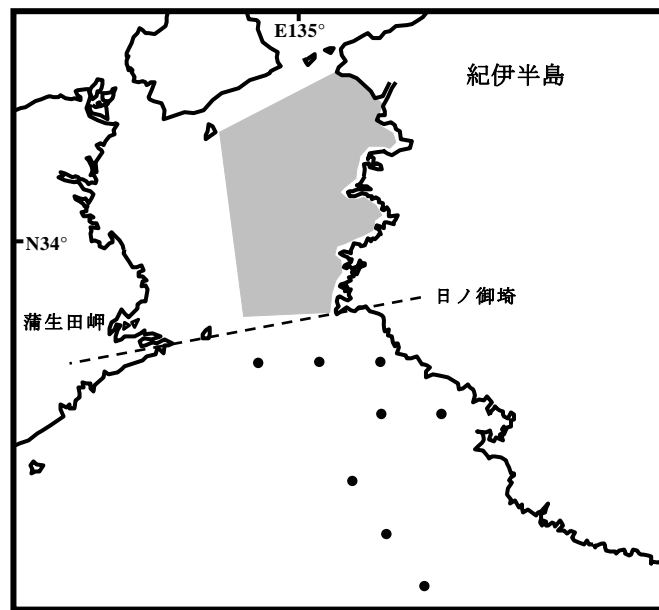


図1 シラス漁場と仔魚調査定点(灰色はシラス漁場，黒丸は仔魚調査定点を示す。)

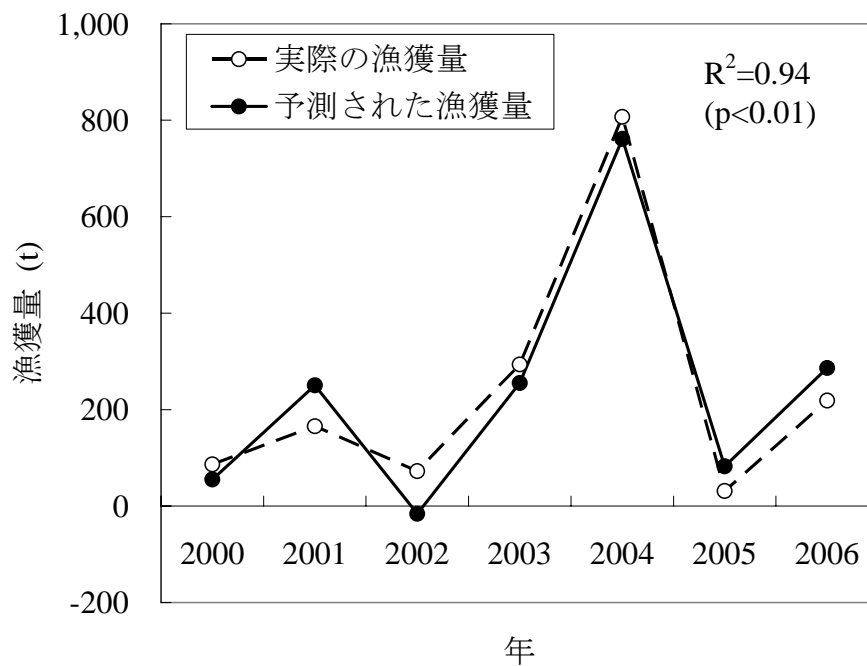


図2 漁獲量予測の結果

[その他]

研究課題名：漁業資源・漁場調査と情報提供事業

予算区分：委託

研究期間：平成12年度～平成18年度

研究担当者：安江尚孝、内海遼一、御所豊穂

発表論文等：なし